

草 創 期 篇

笹川会長が語る
競艇30年

笹川会長対談



〈昭和56年6月8日〉 笹川記念会館



社団法人 全国モーターボート競走会連合会々長
菅川良一



元衆議院議員
坪内八郎

海運立国をめざして

坪内 モーターボート競走も、ことして「法制定30周年」を迎えたわけですが、これを機会にきょうはひとつ、モーターボート競走の生みの親・育ての親でいらっしゃる菅川会長に、法案成立までの経緯やらエピソード、ひいては今後のあり方などにつきまして、いろいろとお話を伺わせていただきたいと思います。

菅川 ぼくはことしを「法制定30周年」の年というよりは、今後100年の計を立てる年、つまり「競艇元年」だと思っています。モーターボート競走は、公営競技の中では一番遅れてできた、いわば弟分であるにもかかわらず、売上では先輩の競馬、競輪、オートレースを抜いているし、その収益金による事業の業績はすでに世界一となった。しかし、だからといって30年の次は31年——というような甘い考えではいけない。備えあって憂いなし、で、この辺でもう一度頭を切り替え、競艇元年ということで出直さなければ駄目になるという考えです。

坪内 戦後、軍部がなくなって軍馬も廃止。そこで農林省が「競馬」を、また復興都市の関係から通産省が「競輪」と「オートレース」をやった。そうして、やがて運輸省の「モーターボート競走」ということになるわけですが、それを積極的に推進された菅川会長のそもそもの発想、つまりモーターボート競走を公営競技にして……、というお考えは一体どういったことから思いつかれたのでしょうか。

菅川 なによりもまず、戦争で破壊された日本を建て直すためには金が必要であった。個人の金、などという、たかの知れた金ではなく大きな金が必要であった。

一方、日本は四面が海であるから、発展するためには「海運・造船」立国でいかなければならないのに、戦争のため造船所も壊滅的な打撃を受け、世界最低となった。これを

まず建て直したい。同時に、海事思想の普及、また海外への飛躍ということを青少年に植えつけてもいかなければならない。こうしたことが第一の目的で考え出したわけです。

坪内 聞くところによりますと、会長が戦犯容疑者として巣鴨プリズンに抑留されておられた頃、すでにそういう構想を抱いていたということですが。

菅川 それはこういうことです。ぼくは何をするにも命がけの男なんです。命をかけなかったらどんな事業だって成功しない。ぼくは大阪でただ一人のA級戦犯容疑者として巣鴨に入ったわけであるが、たとえ自分は死刑となっても日本の立場を連合軍に理解させなければならないという考えから「日本は侵略戦争をやったのではない。日本が侵略戦争をしたというふうに決めつけるなら、それは連合軍も同罪なのだ。」と言いつづけた。巣鴨に入る前ぼくは衆議院議員だったから、自分の選挙区などでも連合軍に毒づいた演説ばかりやっておった。そのあげくの勾留だから、入ってから絶対にもその態度を変えなかった。

坪内 祖国日本のためにあくまでもがんばると……。

菅川 ぼくは入る前（巣鴨プリズンへ）は、十分に日本の立場を主張して「死ぬつもり、だったから、自分の墓までつくってから入った。

日本はいま裁かれている、われわれはその代理人なのだ。

